

Face to Face



TICOは保健医療・農村開発などの分野で、アフリカ・アジアで支援活動を行っている国際協力NPO法人です。

地球規模の問題に苦しむ人たちの自立支援を共同作業により実施し、そこで学んだ経験と知識を地域の人々とわかち合い、私たち自身のライフスタイルを振り返るとともに、地域の精神文化の昂揚に寄与することを目的としています。

TICO 季刊ニュースレター

No.35 2013年12月号

20周年
特大号

ザンビア 安全な妊娠・出産支援

9月に終了した事業の成果と実施した研修についてご報告いたします。

☞p.2-3

ザンビア募金続報

今年の1月から開始したザンビア募金（住民提案型支援）についてご報告いたします。

☞p.6-7

アイビー看護師日本研修

今秋実施したザンビア人看護師の日本研修の様子をお伝えいたします。

☞p.8

国内事務局より

10月に実施したTICO20周年記念イベント「地球人力レッジ」の様子などをお伝えいたします。

☞p.9-11

Delivery at the clinic (施設で出産しよう)



▲「Delivery at the clinic」（施設で出産しよう）を合言葉に村内ねり歩きを実施。
「安全な妊娠／出産支援事業」（2-4ページ）が終了した現在、今後の彼らの活動に乞うご期待!!

ザンビア／チボンボ郡地域住民が支える安全な妊娠・出産支援事業

田村幸根（保健医療専門家）

ザンビア妊産婦保健プロジェクト活動終了報告 —地域のお母さんを地域のみんなで守る—

▲モンボシ診療所で健診の順番を待つ妊婦さんたち

首都ルサカから北へ100キロほど離れた、車で約2時間の場所にあるのがモンボシ地域。この地域に住むほとんどの住民が農業に従事し、とうもろこし畑の広がる大地に散らばって住居を構えるザンビアの典型的な農村地域です。

モンボシ地域の最寄りの診療所は、2009年にTICOの支援で建設されたモンボシ診療所になるのですが、診療所から最も遠い地域では18キロも離れており、その遠い道のりを歩いて来院しなければならない妊婦さんも多くいます。

2010年10月のプロジェクト開始から3年計画で実施してきた妊産婦保健プロジェクト。モンボシ地域の妊産婦の妊娠出産をめぐる状況が改善し、安全なお産が可能となることを目標に活動してきました。これまでモンボシ地域でおざなりにされてきた妊産婦保健に関する正しい知識の伝達が、SMAG（スマッグ：安全な妊娠/出産を支援するための地域住民によるボランティアグループ）の積極的な啓発活動により徐々に実を結び、結果として表れてきています。

また、2012年11月には待望の「お産を待つ家」がモンボシ診療所隣に併設する形で開所し、産前産後のケアを通して安全な出産介助が受けられる環境が整い始めています。

今年9月に本プロジェクトが無事に終了しましたので、成果報告をさせていただきます。



インタビューのようす

※事業開始時調査として、SMAGメンバーによるモンボシ診療所管轄各地域（住民保健委員会が設置されている9つの地域）において、6ヶ月以下の乳児を持つ産婦を対象としたインタビュー調査を実施し、111名から回答を得ました。（2011年4月）

事業終了時調査として、同じく6

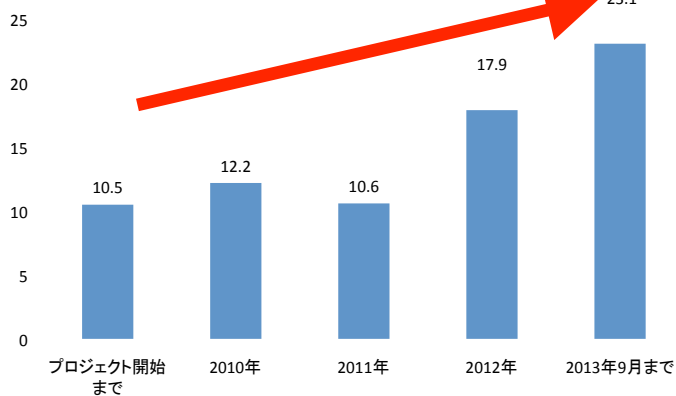
ヶ月以下の乳児を持つ産婦を対象とし、同地域にて120名から回答を得ました。（2013年4月）

成果 1

3年間で施設分娩件数が2倍以上に増加しています。

衛生環境の整った施設で、訓練を受けたスタッフによる介助が受けられるようになり、安心して出産が出来るようになってきています。プロジェクト開始前は、モンボシ地域のほとんどの妊婦が感染リスクの高い衛生状態で、十分な知識を持たない家族や隣人の介助によって自宅でお産していました。

モンボシ診療所での施設分娩件数の推移 (月平均)



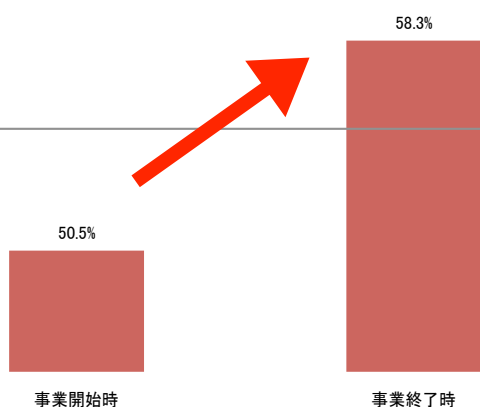
▲モンボシ診療所分娩台帳より

各地域のSMAGが提出している月報によると、モンボシ診療所での施設分娩率が55%（2013年6月月報より）と、政府目標の施設分娩率60%（農村部）に到達する勢いです。養成したSMAGのコミュニティでの粘り強い啓発活動が住民に届いた結果といえます。

成果2

4回以上の妊婦健診を受診したと回答した産婦の割合が15%増加しました。

4回以上妊婦健診受診した産婦の割合



ザンビア政府は、少なくとも4回の妊婦健診受診を推奨しています。70%の産婦が妊娠5ヶ月以前から妊婦健診の受診を開始しており、推奨されている1ヶ月ごとの健診を適切に受診している人が増えてきています。

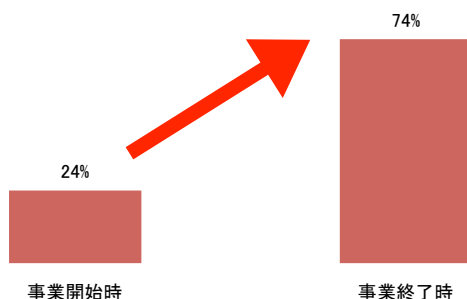
▶モンボシ診療所のスタッフ



成果3

妊娠中に起こり得る危険兆候を2つ以上知っていると回答した産婦が約3倍に増加しました。

妊娠中の危険兆候を知っている産婦の割合



妊娠中はさまざまなリスクが伴いますが、注意すべき危険兆候を知らなければ危険の発見が遅れ、アクセスが容易でない農村部では死に至ることもあります。こうした遅れを回避するため、危険兆候、たとえば出血や、立ってられないような頭痛、胎動が感じられなくなったなどの危険兆候の情報（10項目程度）が診療所のスタッフやボランティアから住民へ提供され、認知度が向上しています。



乳幼児健診のようす

プロジェクト実施運営にあたりお世話になったみなさまには多なるご協力とご配慮を賜り、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

- 2010年10月から2013年9月まで、ザンビア・チボンボ
- 郡モンボシにて安全な妊娠・出産のための環境づくりを目標としたプロジェクト。JICA（国際協力機構）から「草の根技術協力事業」として委託を受け実施しました。

データを分析し、これからの活動に生かしていこう！

今回の研修は、本プロジェクト終了後もSMAGの活動が継続されることを目的に、7月に2日間かけて実施しました。



▲研修の進行役を務めた田淵幸一郎短期専門家と参加したSMAGメンバー

データ分析の手法

SMAGの活動の一つとして、SMAGが地域で把握した分娩件数や妊産婦健診への参加者数などの集計データを月報として取りまとめ、最寄の診療所へ提出することが求められています。

施設分娩数は診療所の記録で把握できませんが、自宅分娩数、死亡件数等については地域で活動するSMAGメンバーにデータ収集が委ねられています。しかし、SMAGメンバー間でも教育レベルはさまざま。足し算が何とかできる程度のメンバーも多く、割算や割合になると知識が十分でないことがよくあります。自らが収集するデータの意義が理解できておらず、「とりあえずデータをまとめて提出してしまえばその後のことは分かりません」となってしまう、それっきりという状態に陥ってしまいがちです。そこをどうにか打破し、正確なデータ収集・分析・評価ができるようになれば、経時変化を追って活動の成果を確認するといった一歩先の行動に結びつけることができます。

この状態を改善するため、例えば、「農村部の施設分娩数の割合について、政府目標である農村部の施設分娩数60%を達成しているかどうか？」について、SMAGから提出された月報データを題材

に、実際に分析評価を行う演習を実施しました。その結果、月によっては政府目標を達成している地域があることが判明しました。



▲SMAGにより収集される月報のデータが何を意味しているのかを伝えます。

メンバーの中には「今までの活動の目的が数字から理解できた」「集めたデータから、活動の達成を図ることができることを知った」といった声が聞かれました。分析方法について十分に理解できるレベルのメンバーもあり、今後の活動のやる気につながればと思います。

まずは自分から変わる



▲村長とSMAGの共同で行った研修のようす

8月上旬の2日間、村で影響力を持つ酋長、村長といったリーダーたちをはじめ、住民ボランティアであるSMAGを合わせた総勢約40名を対象とした研修を実施しました。モンボシ地域の妊産婦保健に関する問題点を知り、リーダー達それぞれに気づきを与えることで彼らからの

具体的なアクションを導き出すことが目的でした。村長代表から「目標に向かって私たちが一つになって働こう！」と力強く訴えるシーンがありました。

研修後、村に戻った村長指揮のもと村々で会合が開かれ、出産のために施設へ行くことや妊産婦健診を受診する重要性を村長から住民に対して訴えたという報告を受けています。「新しい、チャレンジ」が、今後地域住民にとって「あたりまえ、常識」の段階になっていくにはこうした地域一丸となった活動の継続が重要だと言えます。

ザンビアには270名程度の酋長がいるといわれており、特に地方部では絶大な力を持っています。現在も土地所有権については酋長からの許可がいるなど、行政も無視できない存在です。

酋長へのお声かけは、SMAGメンバーからは決してできず、村長の中でも限られた村長だけが出来る行為です。こうした慣習をみな国の法律や規則と同じくらいとても重要視しており、私たちがザンビアで活動を続ける上でも無視できないもののなのです。



▲モンボシ地域を統括している酋長2名

モンボシ☆ホットニュース

瀬戸口千佳（業務調整員）



ついに！モンボシ診療所に看護師がやって来た!!

モンボシ診療所はいつも大忙し。2-3ページでご紹介したように「安全な妊娠／出産支援事業」の結果、診療所での出産数は2倍となり、ますますアイビー看護師／助産師（8ページ）は目の回るような忙しさでした。去年7月に配属された環境衛生士のおかげで全体の業務量は減ったものの、妊娠・出産に関する業務は彼女の担当。毎晩のように出産にやってくる妊婦さんの対応にへとへとになっている姿もよく見かけました。

そもそもの話、事業開始前からアイビー看護師／助産師に負担が集まることは明白だったため、スタッフの追加派遣を条件に「看護師の家」を建設（2012年4月完工）して、今か今かと待っていたのですが、人材自体が不足しているザンビアではそれもうまくは行きません。地域からの看護師待望の声も強く、彼ら自身も粘り強く政府に派遣を要請してきました。

そしてついに！2013年8月に新しい看護師が派遣されました。彼



▲出張健診で予防接種をするミラン看護師

女の名前はミラン・マヨバさん。看護学校を卒業したばかりですが、持ち前の明るさであつという間に地域に溶け込んでいます。仕事に対する意欲も高く、お産も積極的に介助しています。彼女の今後の活躍に期待です！！



ンコンジェ・コミュニティスクールに新しく赴任したニョンド夫妻

ついに！ンコンジェ・コミュニティスクールにも有資格教員がやって来た!!

昨年の11月28日に地元住民に引き渡されたンコンジェ・コミュニティスクールに、2013年10月、ついに有資格教員がやって来ました。600人もの生徒をたった4人の無資格ボランティア教員が教えてきたンコンジェ・コミュニティスクール。有資格教員の派遣およびそれに伴う公立校への格上げ、小学校卒業認定試験の実施は、彼らの悲願でした。校舎のみならず、教員住宅を建てたのも、それが理由。できれば夫婦で教員をしている人たちに住んでもらいたい、という希望も出していたのですが、それも見事に叶えられました。

着任してまだ間もないですが、すでに精力的に学校運営に関わっています。これからのンコンジェ・コミュニティスクールが楽しみです。

ザンビア募金（住民提案型支援）続報！

瀬戸口千佳（業務調整員）

前号でご協力をお願いしたザンビア募金ですが、おかげさまで要望（532,520円）を上回る「**895,607円**」（2013年11月末現在）を頂戴することが出来ました。
改めて厚く御礼申し上げます。

私たちが「安全な妊娠／出産支援事業（2~4ページ参照）」を展開してきたモンボシ地区（モンボシ診療所の管轄域）には**約20の村**が存在します。ンコンジェ・コミュニティスクール（5ページ参照）が位置するンコンジェ村もその一つ。JICA委託事業のように大規模なプロジェクトを動かしていくのもよいのですが、やはりNGOの良さというのは、草の根レベルで**小回り**が利くところ。**地域住民が主体となって実施していく事業を後押しすることを目的に**、この企画は始まりました。

それでは、現在ザンビア募金で支援中（支援決定）のプロジェクトについてご紹介～☆



①まずは3mの深さまで掘ります。



②レンガを積み上げて行きます。



③建造に必要な砂を牛車で運ぶ住民。

その1

家畜薬浴槽ディップタンクの建造 in ンブンドゥ村

モンボシ地区には多くのトンガ族が暮らしています。「トンガ族は家畜と共にあり」と言われ、古くは男の子が生まれると牛が一头与えられる（成人するころには7~8頭の牛を保有）伝統のある部族です。彼らにとって牛は

財産そのもの。結婚のときには牛を送る習慣が残るため、牛を飼えないトンガ族は一人前とは見なされません。そんな大切な牛の天敵が、ダニが媒介するコリドー病などの疫病です。一頭が感染すると、次々に広がっていくため、自分のためにも隣近所のためにも予防が非常に重要なのです。

そこで持ち上がって来たのが、この家畜薬浴槽の建造企画。ンブンドゥ村だけでも約1500

頭の牛がおり、近隣の村々も考慮すると需要は十分過ぎるほど。それだけにンブンドゥ村の住民の意気込みもかなりのものです。

屋根を取り付ければ、形としては完成です。が、ディップタンクとしてきちんと運営されるかどうか、は別問題。ここまで住民一体となって建設してきたのですから、期待したいところですが、そのあたりも含めて進行を見守っていく予定です。



④ようやく地面の上まで来ました。



⑤あとは屋根を乗せれば完成。



⑥⑤を横から見たもの。

その2

改良換気型トイレ設置（コミュニティ
スクール） in マケニ村

マケニ村にあるコミュニティスクール唯一のトイレ（7ページ、写真①）。いわゆる「ぼットン」ですが、汚物を溜める穴が一杯になってしまったので、これを機に生徒用（男女



▲①使えなくなってしまうトイレ

1棟ずつ）、教員・来客用の3棟を「改良換気型トイレ」で設置したいと希望が上がって来ました。

改良換気型トイレはVentilation Improved Pit Latrineといい診療所や学校のトイレとして推奨されているタイプで、略してV.I.P.トイレと呼ばれます。



▲②トイレ建設に必要なレンガを準備する村人。

モンボシ診療所の環境衛生士から、トイレの位置取りから建て方を教わり、雨季が本格化する前に終わらせたいと、せっせと建設にいそんでいるマケニの人たちです。



③交替しながら穴を掘ります。（中にいる人が見えるでしょうか？）穴に立てかけてあるのは、よじ登るための木。

その3

橋の建設（2地域より申請）

モンボシ地域には大小いくつもの川が流れています。住民の多くが農業を営んでいる状況では水が確保しやすい利点がある一方、雨季に増水すると医療施設や学校に行けなくなるという大きな問題があります。今回、村人が申請してきた額に反し、ザンビアの建築業者で見積もりを取ると、その額は目玉が飛び出るほどの高額。これは諦めるしかないのか、いや、

雨季に川が渡れることの裨益の大きさを考えると、そう簡単に諦めるわけにはいかない、でも、どうすれば？？と悩んでいたところ、7月の地球人カレッジでご講演いただいたNPO法人「道普請人」の木村理事長から助け舟が！

出来る限り、地元で手に入る資材を使い、住民の力で架けられる橋の建設について一緒に考えて頂けることになりました。来年の乾季には工事が進められるよう鋭意準備中です！



▲10月下旬に、現場まで視察に来て下さいました！（左端が木村理事長）

その4

カロンガ・コミュニティスクール教材
支援 in ジョブ村

2012年に開校したカロンガ・コミュニティスクール※。教会を間借りして授業が行われています。当初は「校舎を建てたい」という要望が来ていたのですが、さすがにまだ始まったばかりの学校で、今後の

学校運営も軌道に乗ることができるのか見極めが難しいため、まずは小さな支援から始めることにしました。

昨年始まったばかりですので、まだ1年生と2年生しかいないのですが、2年生用の教科書が24人の生徒に対して、たった1冊。教える科目はいろいろあるにも関わらず、この科目の、しかもこの1冊しか学校にないというの

です（7ページ、写真③）。なんとか先生は工夫して授業をしているようなのですが、さすがに無理が大きすぎると判断し、教科書と学校運営に最低限必要な物品を支援する予定です。

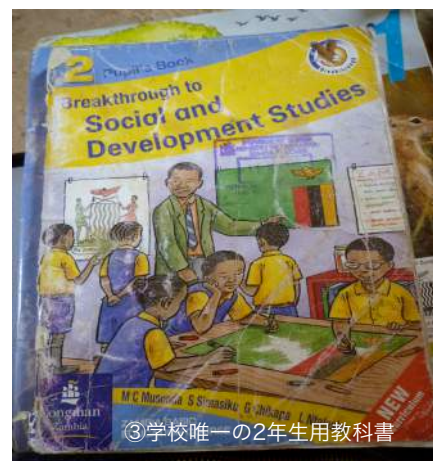
※コミュニティスクールは政府でなく地元の有志によって運営されています。



▲生徒たち。最寄りの公立校徒まで車で3時間以上かかるため、小さい子どもたちは通うことができません。



▲校長夫妻。自分の村の子どもたちが、勉強も出来ずただ時間を無為に過ごしている状況を見て、学校を始めることを決意。



③学校唯一の2年生用教科書

アイビー看護師が日本にやってきた！

田村幸根（保健医療専門家）



徳島県美馬市木屋平診療所医師の往診に同行、医師の献身的な患者対応に感銘を受けたアイビー看護師

2009年にモンボン診療所が開所されて以来勤務している、アイビー・チヨタ・ムクンバ看護師/助産師を日本に招き、主に徳島県内での視察見学などの研修を9月24日から10月10日までの約3週間実施しました。

現在のザンビアの健康指標の多くは、日本の1950年代の数字に似通っています。日本の平均寿命も1950年代は男女共に50歳台前半でした。日本の高齢者への手厚いサービスと、はつらつと生活を営む様子が驚きを隠せないようでした。「ザンビアにいるお母さんを思い出す」と、

高齢者の方々と率先して話をしていました。

また、日本のお母さん方と意見交換の時間を持つ機会がありました。アイビー看護師からは、「夫は育児にどのように参加しているのか」といった質問から、「家族計画はどうしているのか」といった率直な質問まで投げかけていました。お母さん方は思わずたじろぎになってしまう場面もありましたが。。。文化は違えど育児に対する課題や悩みは万国共通であることが分かり、双方にとって非常に有意義な時間でした。

今回の研修がアイビー看護師個人の知識の習得のみならず、ザンビアに戻ってから同僚や共に働くボランティアたちに学んだこと、実践できることを共有し、これからの業務に役立ててくれることを期待しています。

最後に、本研修を快く受入れていただきました徳島県庁、徳島保健所、半田病院、吉野川市役所、JICA（国際協力機構）四国支部、セカンドハンド、ぽっこ助産院、森山小学校、木屋平診療所、さくら診療所、そしてさくらcafeの皆様並びに講師の皆様に対し、厚く御礼申し上げます。また、本研修に関わっていただきましたすべての皆様に深く感謝いたします。ありがとうございました。



▲つるぎ町立半田病院にて「徳島の周産期医療の現状」の講義を真剣なまなざしで受ける。



▲徳島県吉野川市立森山小学校にて給食を試食。



▲生まれて数日の赤ちゃん和アイビー看護師



▲生まれて初めての海。貝殻拾いに没頭。

ゆずを狩って、国際協力!!

11月第2日曜日は、恒例のわらびの会主催「ゆず狩り」が行われています。わらびの会では、収穫したゆずの収益金をTICOへ寄付してくださっています。今年で結成から15年、継続的なご支援をいただいています。

昨年は雨の中、ずぶ濡れになりながらのゆず狩りでしたが、今年は心配された雨が嘘のようにさわやかな天気の中、ゆず狩りを行うことができました。

ゆず狩りボランティア30人程が徳島県美馬市木屋平に集合し、忘れてはならない「革の手袋」を手にはめてから、各々が高枝切りバサミや収穫用ハサミを手にゆずの収穫にとりかかりました。ゆずの枝には、長い刺（とげ）があり、とても素手で収穫はできません。刺に刺さらないように、そしてゆずの実も傷つけないように、慎重に作業は進んでいきました。

今年の春、陽の光が入るよう枝打ちをかなりしたせいか、お昼ごろにはほとんどすべてのゆずを収穫することができました。そして、お昼はお待ちかねのカレーライス！美味しいおやつやおしるこなども振る舞われました。動いたエネルギーを一瞬にして取り戻すほどたくさん頂いてしまいましたが、さわやかなゆずが香る中でのお昼ごはんは最高の一時でした。

今年もたくさんの方々のご協力により、このゆずたちがザンビア支援に役立てられます。「ゆずを狩って、国際協力」を合言葉に、あなたも参加してみませんか？

10月の地球人カレッジ

「この絵を見て、空を飛んでいる鳥と海にいる魚は何と会話しているのでしょうか？」

今年でTICO設立20周年を迎えることを記念して、NGOに長く携わっていらっしゃる池住義憲さんをお招きし、「絵とマンガとロールプレイを通して地域開発、支援・援助、国際協力を考える！」と題して地球人カレッジを開催した時の一コマです。



参加者のみなさんはそれぞれ、アクションを交えながら考えた鳥と魚の会話を披露してくれました。

グループその1※

鳥：「漁船が近くに来ているから、気をつけろ。」

魚：「ありがとう。助かったよ。」

グループその2※

鳥：「空気が汚染されて、喉が痛いよ。」

魚：「海も汚染されて、大変だよ。」



地球人カレッジのようす

※実際の会話とは表現を変えてあります。

どれが正解でどれが不正解ということではないのですが、池住さんが一つの例題を示してくれました。

鳥：「君はなんでそんなに動きがゆっくりなんだい？」

魚：「じゃあ、海に入って、この水の重さを感じてごらんよ。」

国際協力に携わる時、私たちが決して忘れてはならないこと、それはこの「水の重さ」です。TICOは、これからも現地の人々と同じ目線に立ち、そして現地の人々が主体となった支援が出来るよう心がけながら、活動を続けていきたいと思っています。

「より良い地球を次の世代に」 ～考えるから行動に～

TICO 代表 吉田 修

この20年間でザンビアも変わりました。一言で言うと経済発展しています。経済成長率は年6%前後、首都ルサカは自動車が溢れ大渋滞するようになりました。大きなショッピングモールが幾つも建ち、今も幾つか建設中です。以前は外国人しか入らなかったような店に高級車に乗ったザンビア人が当たり前のように入っています。建設ラッシュが続くルサカはどんどん広がっています。富裕層が増えるに連れ、日本と同じ生活習慣病が広がっています。地方でも携帯電話が普及し、モンボシ村でも多くの人が使っています。交通事故もますます重大な問題となっています。その反面、経済発展に乗れない貧困層は都市にも地方にも多数残されています。メタボと栄養失調が、携帯電話と飢饉が、同居する不思議な社会です。

さて20年間で世界は良くなったでしょうか？大きな戦争が幾つもあり、今日も

あちこちで争いが起こっています。地球環境が問題視されて久しいですが、ほとんど有効な対策はとられず、状況は悪化し、気候変動の激しさを実感するようになりました。日本では大震災に見舞われ、原発事故が現実のものとなりました。

先日の徳島新聞にアキアカネ（赤トンボ）が激減したとの記事が載っていました。もちろん人間の活動が影響しています。赤トンボが生きていけない環境で人間だけが生きていけるのでしょうか。

「人類は万物の霊長ではない」確かにそのような気がします。私たちはあらゆるものの中で最も優れているところか、このままでは地球から淘汰される神様の失敗作になりかねません。

この状況をただ手をこまねいて見ているだけで良いのでしょうか。その前日の夕刊には、ブータンで首都の自動車を全部電気自動車に転換する計画、農業も全面的に有機農業にするとの記事がありました。やはり変革は可能なのです。

「徳島で国際協力を考える会」、この“考える”会として発足したTICOは、徳

島（日本）、ザンビアそしてカンボジアで活動を開始し試行錯誤を続けています。20年を振り返って、考えるだけでなく、小規模でも行動を起こして、それを継続して良かったと思います。これからも人類共通の課題に対し、新しいチャレンジを続けていきます。

より良い地球を次の世代に！



よしだ・おさむ：自称兼業農家（外科医）
徳島県出身。アフリカをはじめ世界各国にて国際医療支援活動を実施。現在吉野川市山川町のさくら診療所で地域医療を実践しながら、代表としてTICOを運営。
写真は、1990年12月モザンビーク難民キャンプにて。

カンボジアで救急車に乗り込んで感じたこと

救急出動要請あり。男性が自宅で嘔気があつて苦しうとのこと。私は救急隊2人と一緒に救急車に乗り込む。患者さんの家に到着する。患者さんは60歳くらいと思われる男性。意識はあるがやや混乱している印象。眉間にしわを寄せて苦しうで一見して重症と考える。呼吸は明らかな異常なし。脈拍の触れが弱く末梢が冷たい。ショック状態ではないか？パルスオキシメーターを持ってくる。しかし、SpO2（酸素飽和度）と脈拍がきちんと測定できない。

本人や家族に問診したいが言葉が通じない。救急隊員に聞いてもらいたいと思うがこの2人も英語は全くしゃべれない。手振り身振りも全然分かってくれない。とりあえず救急車の中に運ぶ。搬送先はブンペン市民病院だと隊員が言っている。循環器疾患の検査、治療の設備がないその病院では対応できないのではと思うが、言葉にできない。

救急車の中でもう一度脈に触れるが左右とも弱い。血圧が測れない。酸素ポンペを救急車内に積んでいるので酸素を投与する。患者さんの苦しうな表情が強くなる。

病院に到着。ここでの測定でもやはり最大血圧は60程度である。そこに若い医師が出てきた。「心電図がとれるか？」と聞くと12誘導の心電図をもってくる。心電図は明らかに急性心筋梗塞を示している。しかし、この病院では治療ができない。治療可能な公的病院は1つだけ。しかし高額な医療費を誰が払うのか……。結局、私は輸液の内容と量を示唆して帰国するしかなかった。

TICOでは2007年から、香川県の公益社団法人セカンドハンド、JICAやその他の団体と協力しながら、カンボジアにおける救急医療活動の支援を行ってきました。数年かけてようやく救急医療活動が

渡部豪（保健医療専門家）

定着しつつあると思い始めた時期に前述した出来事に突き当たりました。救急搬送した後の医療技術、医療保険の問題、国の経済成長と医療環境のギャップ……。

課題は実に多岐にわたりますが、カンボジアプロジェクトでは「医療の質の向上」を主眼においてこれからも取り組んでいきます。



新しい仲間をご紹介！ 杉本尊史（保健医療専門家／さくら診療所医師）

今年の春に、長崎の離島から徳島の内陸に移り住んできました。ゆったり流れる吉野川と、そこから伸び上がる高越山のどっしりした姿が、海から来た人間にはとても新鮮に映ります。私の仕事柄、日々たくさんの人たちと顔を合わせ、話をしています。寛容な田舎の気質に海か山かの違いはないようで、土地の方言を除けばおかげですんなり馴染めているように思います。

6月、私にとって最初のTICOの活動として、美馬市木屋平にあるゆず畑の手入れ作業に、家族共々参加しました。そもそも木屋平を含む徳島県西部剣山系の奥地は、『ゲゲゲの鬼太郎』では妖怪・児啼爺（こなきじい）の出身地とされ、また手塚治虫の『きりひと讃歌』では奇病の起こる架空の集落・犬神沢の舞台でも知られる、秘境と呼ばれる土地柄です。こういう機会でもなければ、なかなか外部の者が好んで入っていくところではないかもしれません。曇り空の下、怖々半分に到着したゆず畑は、深い沢へ落ち込む山の急斜面に段々と伸びていました。

実際の手入れ作業は、ゆずの木の新しい梢を間引くことで木の形を整えて、中の枝葉に日光を誘導します、と「わらびの会」の方に教えていただきました。竹棒の先端に鉤（かぎ）を取り付けだけの簡素な道具を使って、手際よくさっさと間引いて見せてくれました。枝を選んでそれに鉤をひっかけ、さっと刈り取る一連の作業に初めこそ時間がかかりましたが、慣れてくればどうということのない作業です。一列に並んだゆずの木を、手分けして一本ずつ順番に剪定していきます。やがてぼつぼつと雨が落ち始め、作業も終盤に差し掛かってきました。隣の木を剪定していたわらびの会のメンバーの方が、手を休めることなくふとつぶやくように私に言いました。

「これがざんぴあにいくけんな。」

「うちらざんぴあに行ったことはないけど、(吉田)先生のおかげでざんぴあとながつた。」

ほほかむりをしたその顔はよく日に焼けてしわがれ、お年寄りと言ってよいベテランの女性です。わらびの会の皆さんは、人手不足や高齢化によって放棄されたゆず畑を管理して、秋の収穫で得た収益を毎年TICOに寄付されています。寄付金は、TICOが活動しているザンビアの地域の住民を支援するために使われています。徳島の山深い過疎地で、ゴム長を履いた姿から不意に出てきた「ざんぴあ」は、これまでで最も強く私の心に響いた「ZAMBIA」でした。

TICO設立20年の節目に居合わせることができたことを光栄に思います。その長い間に渡って、TICOの活動を陰に陽に支えておられる方々に敬意を表するとともに、これから私もTICOの一員としてご一緒させていただきたいと思います。



ゆず狩りにも親子で参加

事務局長 福士庸二のつぶやき

今更！国際協力のススメ～出会いに感謝～

TICOは今年設立20年を迎え、年が明けると私自身国際協力に携わって25年になる。さて、何が楽しくて、四半世紀もの長い間、この活動を続けているのだろう。そんなことをあらためて考えてみた。

答えは「出会い」。私が今ここにいること、家族と暮らしていること、また、TICOを支えてくださる会員の皆様、人種を越えたかけがえない友や諸先輩、優秀なスタッフたちに恵まれ日々励まされ、そして国際協力を志す若者たちからはエネルギーと心躍る刺激を貰うなどなど、すべて、「出会い」があったから。そのひとつひとつが、私の大切な財産となっている。

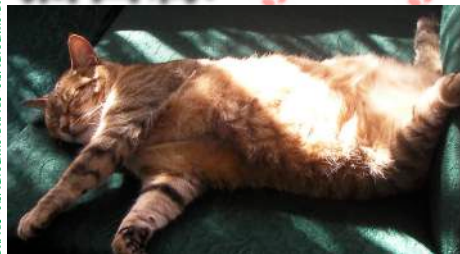
この先、どんな出会いが待っているのだろうか。これからも出会う人たちと、ともに学び、豊かな世界を目指して行こうと思う。

さあ、参加しよう！「国際協力」



▲様々な出会いに感謝!!

猫目線



ザンビア生まれザンビア育ち、猫のチャイです。日本の皆さん、お元気ですか。今年のご主人の団体、TICOが設立されて20周年だそうです。ちなみに私の母国ザンビアは来年で独立50周年を迎えます。1964年、東京オリンピックの閉会式の日（10月24日）に独立

し、それと同時に日本が承認したため、開会式では北ローデシアの旗を持って入場した選手団が、閉会式ではザンビアの国旗を掲げて行進したという逸話をご存知でしょうか。独立後は、初代大統領ケニス・カウ نداが「一つのザンビア、一つの国家（One Zambia, One Nation）」というスローガンを掲げ、民族融和を謳った政策を実施してきたこともあり、アフリカの中では珍しく、独立以降は一度も内戦を経験していないとても平和な国です。昨今は経済発展も著しく、「アフリカ＝貧困」のイメージで来られるとあまりの発展具合に驚かれる方も少なくありません。

じゃあ、どうしてご主人は活動をしているのでしょうか？まず、経済発展といってもまだまだ発展途上であり、いまだ人口の6割が「貧困層」。また富裕層が増える中で、格差は拡大しています。都市部と農村部の格差も大きく、村に数日泊った後に首都のモールに行った日にはあまりの違いに卒倒しそうになるご主人です。村には学校も病院もまだまだ足りません。

ザンビアがTICOを始めとする海外からの支援から独立する日が早く来ますように。にゃー。

ご支援ありがとうございました

TICOの国際協力活動は、皆様からの寄付金や会費によって支えられています。温かいご支援をお待ちしております。

寄付をいただいた方（書き損じハガキ含む）

宮本艶子、神園索己、高木クニ子、新野和枝、原田栄枝、森章子、横山永子、白石勝美・久代、峰尾武、金納千晴、北島コーポレーション、原田恵子、竹岡サヨ子、後藤田立公、秋月良子、佐藤美千子、ヒラオカ薬局、橋本伸子、ホウエツ病院、船津まさえ、株式会社袖りっ子、後藤田健二、八木、蓮井孝夫、長野リセ、西村美香、内藤健晴、高島百合、山本秀樹、河野南代子、堺隆弘、わらびの会、片岡麻衣子、佐藤文子、佃千代子、井科香代子、土江文枝、岩田祥三、滝沢伸子、程野千代子、近森憲助、さくら診療所、さくらcafé、TICOサポートクラブ、吉田益子、福土庸二、吉田修、匿名5名

井内誉範・晴子、原田栄枝、岡崎明美、吉見千代、古川久美子、山岡智互、香西邦明、久保真一・恵子、篠原幸隆・弘子、松田恵美子、太陽と緑の会福祉事業団、住友和子、地造津根子、浮森和美、中谷加奈子、福井康雄、福井照実、池見真由、鈴木薫、廣瀬文代、佐古和雄・友美、橋本浩一、松田佳子、三田理化工業株式会社、大塚和子、佐治朝子、庄野真代、加藤恵、馬場節子、高井美穂、瀧浩樹、津田道子、凌泰君、加涌由貴、今心株式会社、木本豪、森久美子、笹井美由紀、吉田純、木村秀樹、寺口カミコ、大室直子、上原正敏、細谷孝子、大橋瑞紀、田淵幸一郎・千夏、渡部豪・あかり、福土庸二・美幸、吉田修・益子

新たに入会された方

井上聡、浜垣伊津美、柴田三千子、西村美香、匿名1名

●2013年7月1日～2013年11月30日

●順不同、敬称略

会費を更新された方

井原宏、大脇甲哉、酒巻栄子、峰尾武、井口千陽、田岡敬子、神園索己、寺口美香、大多和通夫、寺田由紀、中村純子、船津まさえ、峯裕恵、

TICOへのご寄付の方法

郵便振替 — 01640-6-37649（加入者名）TICO

銀行振込 — 四国銀行 山川支店（店番号344）

普通 0199692

特定非営利活動法人TICO

代表理事 吉田修

カナ入力の場合は、トクヒ）ティコ

募金箱 — さくら診療所（徳島県吉野川市）に常設しています。

インターネット — TICOウェブサイトのバナー広告をクリックして、そこからご購入物していただくと、代金の一部が寄付されます。詳しくはホームページをご覧ください。

書き損じはがきを集めています。

TICOへの入会方法

会員となって資金面からもTICOの活動をサポートしてくださる方を募集しています。会員の方には、TICOニュースレター“Face to Face”を毎月お送りいたします。

年会費

賛助会員	個人	¥12,000
	学生	¥6,000
	団体	¥15,000

正会員 ¥12,000

※通常は賛助会員でのご入会をお願いしています。総会での議決権を持つ正会員を希望される方は事前にご連絡下さい。

入会ご希望の方は、年会費を郵便振替にてお支払い下さい。郵便局備え付けの振替用紙で、次の口座へお願いいたします。

口座番号 01640-6-37649

加入者名 TICO

ご住所・ご氏名・お電話番号の他に、Eメールアドレスもお持ちでしたら通信欄にお書き添下さい。

なお、ゆうちょ銀行自動引き落とし、クレジットカード払いも可能です。詳しくはホームページをご覧ください。

TICOニュースレター Face to Face 第35号

2013年12月発行 発行人：吉田 修

編集：近森 由記子

特定非営利活動法人 TICO 事務局

〒779-3403 徳島県吉野川市山川町前川120-4

電話：0883-42-2271（平日 9:30～18:30）

メール：info@tico.or.jp / ウェブサイト：www.tico.or.jp